

| | | | |
|-------|-------------|-----|------|
| 授業科目名 | 哲学(2000013) | | |
| 時間割名 | 哲学(35101) | | |
| 時間割担当 | 表弘一郎 | | |
| 実施期 | 後期 | 単位数 | 2 選択 |
| 曜日・時限 | 水・5 | | |

授業の目標・概要

人の精神・自我・美意識・時間や空間に対する認識の共有化について考えるとき、科学では解明しきれない様々な課題が存在します。その課題の背後にある真理を探求するのが、哲学のひとつの意味です。

この授業では、より具体的に、<共生>という現代社会の課題を哲学の観点から考察します。<共生>は、いじめやパワハラ、セクハラ、DVなどが頻発し、貧困と社会的排除が劇的に進行する日本社会にとって重要な課題であるとともに、グローバル化のもとで要請される多文化共生を考える際にも不可欠な理念です。その場合、問いは「誰かを排除せずに<共生>することは可能なのか。<共生>は、差別的・排除的な構図でしか成り立たないのか」というようになります。共生と排除とのせめぎあいを、おもに社会哲学と政治哲学の議論を踏まえて考察します。

学習の到達目標

「21世紀型市民」に必要な共生という理念の射程を、哲学の観点から根本的に考察できる能力を養い、多文化社会のなかで生きていく手がかりにしてもらいます。

授業方法・形式

教科書にもとづいたレジュメとパワーポイントを組みあわせて進め、質疑応答をしながら授業を行ないます。映像資料も適宜使用します。

授業計画

- 第1回 <共生>の哲学へ向けて
 <共生>の哲学は、さまざまな人間が傷つけあいながらも苦しみを分かちあって共に生きる可能性を考察の対象とします。この点を考えていきます。
- 第2回 <共生>の限界状況
 現代社会の課題としての<共生>の限界状況を、いじめやパワハラなどの現況に即して考えます。
- 第3回 存在の否認と承認の忘却 - ホネットの承認論
- 第4回 対象への愛 - アドルノの『ミニマ・モラリア』
- 第5回 「付け加わるもの」 - カントの自由論とその批判
- 第6回 <共生>の新しい可能性条件
 脱統合の進行と再帰性の増大と承認の忘却としての物象化を前提として、<共生>の可能性を練り直すこと。以下では、この点についてリスク社会論の知見をもとに考えます。
- 第7回 リスク社会と再帰的近代化
- 第8回 リスクの個人化と社会的排除
- 第9回 包摂的シティズンシップ - アーレントの「諸権利をもつ権利」
- 第10回 メンバーシップは誰が問うのか - ベンハビブの「民主的反復」
- 第11回 「社会」の変容可能性 - アリストテレスの「政治的共同体」から「世界社会」へ？
- 第12回 居場所の哲学、驚きの哲学 - ルカチ、ハイデガー、九鬼周造
- 第13回 <人間>と権力 - フーコーの「生権力」と「統治性」
- 第14回 リスクを賭けて本当のことを自由に語る - 「パレーシア」
- 第15回 全体のまとめ
 授業冒頭で掲げた問いに対して、どのような解が見出されたのでしょうか。全体をまとめます。

成績評価の基準

概ね授業への積極的参加度10%、授業中のワークシート20%、学期末試験ないしレポート70%で評価します。

授業時間外の課題

授業中に内容理解を問うワークシートを書いてもらいますので、必ず予習と復習は行なってください。

メッセージ

哲学と聞くと、みなさんはなんだか難しいイメージをもつかもかもしれませんが、日常の具体的な場面に即して考えていきましょう。なお、この授業では教科書を使用しますので、必ず購入するようにしてください。

教材・教科書

表弘一郎（2013）『<共生>の哲学 - リスクによる排除と安心の罫を超えて - 』耕文社。

参考書

- 花崎皋平（2002）『<共生>への触発 - 脱植民地・多文化・倫理をめぐる - 』みすず書房。
 A. クラインマン他（2011）『他者の苦しみへの責任』みすず書房。
 表弘一郎（2013）『アドルノの社会理論 - 循環と偶然性 - 』白澤社。